

I 事業の概要（地域の実情を含む）

- 本事業は今年度で34回を数え、歴史的にも貴重な交流事業となっている。震災時には本事業によって培われた吉里吉里と紫波町との絆により、どこよりも早く支援の手が差し伸べられ、危機的状況の中、希望の灯火をもたらしてくれたと、吉里吉里地域では語り継がれている。

近年児童数の減少に伴い、事業の継続が難しさを増す中、地域を挙げて継続の意志は硬く、本年度も実施することができた。参加者の中には、小学校時代にこの交流に参加した経験も持っている保護者や地域の方々がおり児童交流と共に地域の交流の意味合いを充分持っている。

本事業は、

- ①両町の児童が体験を通して、お互いの地域の特色を理解するとともに、交流を通して交友関係を広げ、友情を深め合う。
- ②交流のお世話をするを通して、親や家族、地域を見直し、より良い地域づくりについて考える機会とする。

をねらいとして実施されている。

で培われた「絆」について感謝を伝えることができた。



II 取組の概要

(1) 実践校

大槌町立吉里吉里小学校 第5学年 16名
紫波町立片寄小学校 第5学年 7名
紫波町立上平沢小学校 第5学年 6名

(2) 実施期日

前期 平成30年7月28日（土）
後期 平成30年9月8日（土）

(3) 実践内容

① 前期交流

- あいにくの曇りで夏としては気温も低く時折雨模様ではあったが、紫波の学校2校と、保護者、地域の有志が、吉里吉里を訪問していただき、雨の晴れ間を使って、海水浴体験、砂の造形体験、昼食をともにし、交流を深めた。海水浴体験では、海の安全な過ごし方や海の豊かさなどについて、地域の方からお話をいただいた。また、震災時の支援について話す中で、本事業



② 後期交流

- 吉里吉里小学校児童と保護者、地域の有志が紫波町を訪問し、蕎麦打ち体験、八幡宮祭り参加、昼食を共にし、交流を深めた。

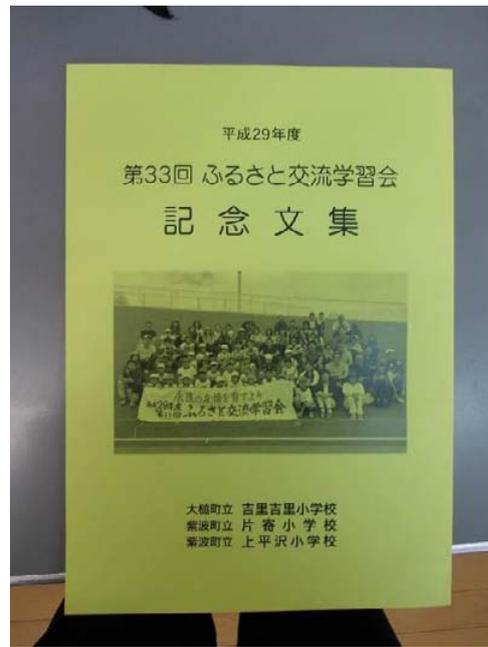
紫波では、過年度において体験活動を工夫し

ていただき、稲刈りや、競輪場での自転車体験など紫波の特色を活かした体験を提供していただいている。吉里吉里の児童にとってかけがえない体験となっている。



③ まとめの活動

- ・ 本事業においては事業終了後、児童並びに保護者の感想や地域の方々の作文などを、毎年文集の形で残している。今年度分も児童の反応は肯定的なものがほとんどである。保護者も自分の子どもが5年生になれば「ふるさと交流」に参加するものとして認知されており、多大なご協力を頂いている。



(平成 29 年度 第 33 回交流文集)

III 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 歴史のある交流事業に対する相互評価は揺るぎないものがある。震災後は、吉里吉里地域においては特に本事業の継続がもたらした絆が再認識されている。対外の交流により語り継ぎの意義も高まっている。また、児童たちが将来にわたって交流が続いているということへの期待感も感じられた。
- (2) 吉里吉里においては「ふるさと科」学習の側面も充分兼ね備えており、児童にとっては、貴重な機会となっている。
- (3) 参加いただいた保護者や地域の方々にとっても、本事業の意義が十分に評価されている。まさしく地域ぐるみでの交流の輪が広がりを見せている。お互いに、地域の特色を活かした活動内容となっており、ねらいに沿って交流が行われている。

2 課題

- (1) 児童減少、学校統合の問題があるが、今後も身の丈に合った交流を継続することで合意形成ができていく。しかしながら地域の受取り方も多様化しており活動内容の更なる工夫が必要である。
- (2) 児童数の減少は、交流に係る経費の問題に直結するものである。事業の継続には助成金などの有効活用が必要である。交流学習スクールによる支援は誠にありがたかった。